

平成27年度 秋田県生涯学習審議会（要旨）

- 1 日 時 平成27年7月29日（水）午後1時30分から4時まで
2 場 所 秋田県庁第二庁舎 4階高機能会議室
3 出席者

<秋田県生涯学習審議会委員>

千葉 良一	会 長	八峰町教育委員会教育長
谷口 吉光	副会長	秋田県立大学地域連携・研究推進センター教授
及川 真一		日本赤十字秋田短期大学介護福祉学科助教
小玉 由紀		子育てカフェ・にこリーフ代表
境田 未希		株式会社境田商事取締役
佐藤 力		大仙市大曲市民交流プラザのびのびらんど代表
清水 洋子		前能代・山本地区生涯学習奨励員協議会理事
保科 恵一		由利耕心大学本荘地区理事
松田 知己		美郷町長
水野 勇氣		秋田プロバスケットボール株式会社代表取締役社長

<事務局>

鎌田 信	教育次長
沢屋 隆世	生涯学習課長
昆 麻里子	生涯学習課 生涯学習・読書推進班 副主幹（兼）班長
舘岡 江里	” 指導主事
東谷 秀昭	” 社会教育主事

協議 知と行動が結び付いたクリエイティブな循環型社会を実現するために

◇「行動人」の活用について

- ・今の子どもたちは、失敗する経験が少ないと感じている。時にはゴールが失敗だったとしても、自分たちで何とかしようとして様々試みることが、「行動人」につながるものと思っている。
- ・支援される側の方は、与えられたり支援されたりすることが続くと、自分で動かなくなったり、待っているだけの人になってしまう。自ら動いていかないと活動は続かないし、創造性も止まってしまう。参加者側にいた人たちは、どうやって自分たちが動いていくかを考えなければならぬ。そして、主催者側は、活動を企画することから、後から応援していく形へ切り替えていきたい。
- ・「行動人」がもっているスキルを、県民が活用できるように、Webサイトをとおして伝えることが必要でないか。また、「行動人」に載っていない人でもスキルをもっている人はたくさんいるので、そうした人々とうまく結び付くことができればよい。
- ・Webサイトで紹介された「行動人」は増えているが、その人数が多ければいいというものではない。「行動人」が、生涯学習に関わる講座を開くような自主企画講座の支援や、「行動人」ネットワークの活用が重要である。

◇「あきたスマートカレッジ」の講座について

- ・「あきたスマートカレッジ」は、知識を得るための講座が多い。地域コーディネーター養成講

座のようなものを組み込み、地域のリーダーとなれる人材を育成していく講座があると、次世代の人たちも参加しやすくなる。

- ・市町村と県との連携した取組が「あきたスマートカレッジ」にあってもいいのではないか。例えば、今年実施した「まるごと大館!!」という講座を拡大し、年間2市町村ずつやるようにしてはどうか。あるいは、市町村と協働で地域に関連する歴史、産業、文化、食など「地域のまるごと」の講座を企画し、秋田市内で展開するのはどうか。開催する市町村と学びの対象となる市町村とをずらすという逆転の発想も大事。他の市町村の話聞くうちに、「その市町村に行ってみよう」という変化が生まれるのではないか。
- ・「秋田のピカイチを学ぼう」というような講座はどうか。また、何回かの講座修了により、スキルを獲得できるようなものはどうか。情報発信力講座やプレゼン力講座なども考えられる。教育庁だけでなく、企業やNPOを含めて、秋田の学び、生涯学習の学びの仕組みを作るというのも魅力的な提案だと思う。

◇読書について

- ・図書館や学校だけでなく、通行止めにした道路で本を読むというのも、子どもにとっては大きな刺激になるのではないかと思います。今年度は、読書と商店街をつなげていく取組を考えている。
- ・今年の高校入試を見ても、文章力がなければ解けない問題に変わってきている。小さい頃から子どもを読書に親しませ、文章力をつけることが大事である。
- ・会社や地域に貢献できる人材を育てるためには、知的好奇心を高めていくことが大切である。図書館は無料で利用できるすばらしい施設なので、どう有効活用するかという施策が重要である。
- ・生涯学習の深まりという点から考えると、歳をとって死んでいく最後の日まで、心を強く保ち続けられるかどうかは難しい問題である。内面的な覚悟を育てるのは読書や学びだと思う。大人向けの読書専門の講座や読書案内の講座、「話題の本を読んでみよう」というような講座があってもいいと思う。

◇地域づくり、まちづくりについて

- ・集いの場所としての現在の問題は、運営主体の人々が高齢化していることである。若年層の人たちに運営に参加してもらうため、生涯学習講座の利用者に呼びかけるなど、色々な方法を試みている。地域づくりをするときに、市民が集える拠点があるということは大事である。いくつかの団体がネットワークを築くと、何かあったときに助け合える。面としての拠点が地域の中にあると、人の交流や世代交代も進んでいくのではないか。
- ・郷土の「地理」「歴史」「生活」に関する学びを充実させなければ、雪国に住むハンディを背負いながらここに残っていこうという気にはならないのではないか。地元でどういう人がいたか、どういうものがあつたかという教育が不足しているのではないか。
- ・生涯学習奨励員の研修で、地元の食材の収穫を初めて体験したが、地元を知るためには、小さいときからの体験が大事であると感じた。
- ・ふるさとを愛するためには、小・中・高校生に「秋田はいいところだ」「秋田には可能性がある」と言い続けることだと思う。若者が秋田に戻ってくるためには、秋田に対する誇りが必要である。そういうところに県が力を入れてもいいのではないか。
- ・毎週末、地域の道路を通行止めにし、子どもを連れてくるお客さんや年配のお客さんが触れ合える場所づくりをしている。秋には、「ハロウィンパレード」を行っている。子どもだけでなく親や祖父母も一緒に来る場所にしたい。地域では、自分たちも役に立ちたいと言って、昔遊びのけん玉や竹馬などをやる年輩の人々が積極的に集まってくれる。そのような人々がつなが

っていける場所であってほしいし、そのような場所を提供していきたいと考えている。

- ・ 前回、「地域の住民活動や地域の特色から生まれてくるテーマについて、行政と協働で課題解決に取り組んでいくためのシステムづくりが大事でないか」ということが話題になった。そういう問題意識と知識をもっている人が、自分たちの行動を互いに結び付けていけば、クリエイティブな循環型社会の実現につながるのではないか。
 - ・ 地域の住民参加を促す取組が、なぜ活発に行われているかを考えると、少子高齢化、人口減少、集落消滅といった危機感が県民一人一人に浸透し、一般の県民も自分たちで考えて行動するようになったからではないか。県民の中で盛り上がっている「地域づくりに参加したい」という気運に、生涯学習をどう結び付けるかが課題だと思う。
-